

インド訪問記

村上 和弘

インドは南アジアに位置し、世界で最も人口の多い国です。多様な文化、言語、宗教、そして伝統を持ち、その歴史は数千年にわたります。また、経済的にも大きな国であり、IT産業、医療、製造業などさまざまな分野で急速に成長しています。昨年2月には駐日インド大使である Mr. Sibi George が本学を表敬訪問され、7月には在日インド大使館の後援のもと、本学にてインド - 日本がんシンポジウムが開催されたのは記憶に新しいところです。その際に来日されたTATAメモリアルセンターACTRECの副所長 Dr. Prasanna Venkatraman に招待され、The 3rd International Global Cancer Consortium Conference (2024年2月3 - 4日開催)に参加するために、インドムンバイを訪れました。

インドの映画産業であるボリウッドや金融・経済の中心地であるムンバイまでは、小松空港 - 羽田空港 - デリー空港 - ムンバイ空港と乗り継ぐ計20時間弱の空の旅でした。学会では2日間に渡って、ヒト化マウスモデルをはじめ、がん微小環境やがん免疫療法などの多岐にわたるテーマに関して活発な議論が行われ、若手研究者や学生によるポスターセッションも行われました。応用研究に焦点が当てられる傾向にありますが、インドの科学が高水準であること、人々が積極的に機会を得て貪欲に知識を吸収しようとする姿に、身の引き締まる思いでした。また、がんの高度治療・研究・教育を行う専門機関であるTATAメモリアルセンターを訪問し、共同研究体制の構築を目指した協議や教員との個別議論を行いました。その場で多く聞かれた意見は、インドの基礎科学の水準は一樣ではなく、将来の研究者や科学者の育成に必須である研究インフラや科学教育の普及と促進には未だに多くの課題があるというものです。インド政府により基礎科学の水準向上に向けた取り組みが強化されていますが、現場レベルでの国際的ネットワークの構築強化や交流プログラムの促進が求められていました。

週末にはムンバイの市街地を訪れる機会がありました。街には近代的なビルが林立する一方で、ムンバイ大学などイギリス領であった頃の建築物も多く、その面影が色濃く残っていました。レストランやショッピングモールは人々でごった返しており、人々の購買意欲の高さを物語っていました。

発展していくインドの将来を見据えて、お互いに良い関係を築きつつ、技術交流や人材交流、実験材料の共同利用など、我が国の基礎科学の発展維持に我々が果たせる役割をしっかりと考え、着実に取り組んでいく必要があると改めて感じた訪問になりました。

最後に、本訪問は部局間交流の一環として実現したものです。この場を借りて心よりお礼申し上げます。



学会にて(筆者中央)



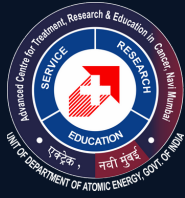
集合写真



施設訪問



若手教員と(筆者:右)



Global Cancer Consortium
Helping cancer patients around the globe



3rd International GLOBAL CANCER CONSORTIUM CONFERENCE

Organized by GCC, GCC South Asia Chapter & ACTREC

Current Trends in Tumor Microenvironment & Therapeutics
3rd and 4th February, 2024

Demonstration Workshop on
“Humanized Mice: Model Generation and Applications to Anti-Cancer
Immunotherapeutic Drug Development”
5th February, 2024



Venue

Tata Memorial Centre, Advanced Centre for
Treatment, Research and Education in
Cancer, Sector 22, Kharghar, Navi Mumbai –
410210, India

Gmail: gcc.sachapter@gmail.com

Website: <https://glocacon.org/event/3rd-international-global-cancer-consortium-conference-2>